

はじめに

人の心は目では見えない。物ではないから色も形も重さもない。音も臭いも味もない。しかしそれは確かにある。目では見えないのに、それがあつたことを疑うものはいない。まるで空気のように、意識すらあまりしない。でもそれがなくては、人ではなくなってしまうだろう。

この連載は私の心ではなく、子どもの心について考えようというわけである。私の胸の内ならいくらでも述べることのできる。ところが、かの「子ども」の心となると、想像するしかない。私には妻と子どもがいる。子どもと言っても働いているから、もう子どもとはいえない。

子どものこころ

新連載1

〔せいがの森保育園園長〕

倉掛 秀人

こころが「みえる」とは

一方、職場の保育園には赤ちゃんから六歳までの子どもたちが百人ほどいる。毎日興味深い出来事が起きる。その出来事をご紹介しながら、子どもの心について私の心に映るものを述べていきたいと思う。四季折々の心象風景である。すると、子どもの心には輪郭も重さもあり、色彩も香りもするから、おもしろい。

春の訪れ

二月の深夜、園庭のビオトープに早春を知らせる生き物がやつてくる。「コロコロコロ」。その声はとても美しい。録音して他人に聞かせてあげたいと思うが成功したためしがない。近づくと鳴きやんでしまうからだ。その美声の持ち主はヤマアカガエルである。

月夜の晩に卵を産みに来る。そしてまた冬眠に戻る。不思議な生態だが、まだ寒い時期に産卵するのはへびに襲われないですむ進化の賜物らしい。

翌朝の園庭は園児らの歓声がこだまする。「スッゲー、こつちもある」「おい、こつちにもあった」。これが我が園に春の訪れを知らせる風景だが、数日後、雪が降り川面が凍ったことがある。年少組の男子二人が座り込んで卵を見ている。透明なゼリー状の塊の中の黒い粒々が、雪の間から見えている。その時こんな会話を担任が拾っている。

「助けたいけど、触っちゃダメなんだよ。だってお腹の中の赤ちゃんと同じなんだもの」カエルの卵が冷たい氷と雪の下にあること



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森保育園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

を心配して、取り出してあげようと思ったのだ。しかし触ってはいけない。赤ちゃんなのだから。お母さんのお腹を触ったことがある彼らは、そつとしてあげなければならぬことをよく知っている。お腹の中の赤ちゃんとは、もちろん人の母親の、である。だからカエルの卵にもそうしよう。そんな心の動きを、子どものつぶやきは教えてくれる。

卒園式の翌日、東京は桜の開花が宣言された。オタジャクシを紙コップですくい取り、手のひらに乗せて観察している。ピチピチはねる。「まだ、足は出ていない」。

子どもたちは、卵からオタマジャクシになり、手足が出てカエルになる成長をよく知っている。毎年繰り返される自然の営みが、子どもの生活に浸透している。

教育の意図性

そこで子どもは何を感じ、何をどうしたいと考えているのだろうか。その成り行きの中に、私たち教育者の願いはどう反映されているのだろうか。子どもの心の動きを全て把握することは不可能である。しかし子どもの姿は見える。行動もわかる。言葉や話を聞くこともできる。その「態度」から「意欲」や「心情」を想像することが、私たち教育のプロの力量でもある。子ども理解、保育実践、子

もの変容、省察のいずれでも、子どもの心をもどまでとらえ得たかが、私たちに問われているのである。

私の園では子どもの育ちゆく姿を保育目標として「自分らしく意欲的で思いやりのある子」と表している。これを教育界では「教育の意図性」とか「教育のねらい」と呼ぶ。これがなければ教育ではなくなってしまう。全くの偶然に任せておくわけにはいかない。

そうはいっても、私の園では、カエルの卵を大事にして欲しいと子どもに直接話そうなどとはあまりない。ただ生き物がいる場所とそうでない場所があり、生き物を小さい時から育て、よく観察してきた。子どもが思わず心を奪われ、引き込まれていくような生活状況を作り出すことを心がけてきた。これは「適当な環境」（学校教育法二二条）と言われたきた。すると、子どもが本来持っている力が、子ども同士のかかわりの中で育っていく。条件が整うと芽を吹きだす草花のように。

いま園庭の梅も咲き終わり、梅の実がなり始めている。梅を収穫する時期がもうすぐくる。園庭の畑で種から野菜も育てる。夏野菜や冬野菜のお世話は収穫があるから待ち遠しく楽しい。みかんやりんご、柿やびわもなる。雑木林で捕ってきたカブトムシが一年中室内で飼われたりもしている。ちょうど今、

幼虫がゴソゴソ動いているのが見える。まだ蛹になる前だ。そばには図鑑に見入っている子どもたちがいる。

子どもを信じているのは子ども

幼児が赤ちゃんと過ごすことも多い。子どもは子どもにも人見知りしない。四月の新入園児のそばで園児が相手をする。大人だと泣いてしまう子ども、子どもには警戒心を持たない。そんな事実も核家族の少子社会では忘れられてしまったようだ。

赤ちゃんは生まれながらにして、人と関わる力もある。それを裏付ける実験データがぞくぞくと発表されている。それらの知見は、私たちに子どもの声をよく聞こう、と促している。よく聞こうとしないと語りかけてくれない。知ろうとしないと打ち明けてくれない。しかも、その姿は子ども同士の中で見いだされることが多い。子どもの中には子どもが必要不可欠である。関係が子どもを育てている。しかも、それは赤ちゃんの頃から、力強く営まれていく。

子どもから子どもが奪われて久しい。園や学校に集団があるからと、安心してはいけな。孤独な集団になっている場合もあるからである。

よく晴れた日だった。満三歳になったばかりの子も数人が、蓮の鉢の周りで「おさかなさん」と言って水面に手を入れている。担任がそれを見て子どもの背中から、「おさかなさん、サワラナイデ、ミテルダケ」（触らないでね、見るだけだよ）とゆっくり声をかけた。鉢の中でメダカが泳いでいるのだ。その様子をビデオで撮った。クローズアップしたフレームにすばしっこく動くメダカを捉えることができた。そして研修会で使うために編集して気付いた。私が見ていたもの、担任が見ていたものは、間違っていた。人の思い込みとは、なんと強いものだろうと、つくづく思った。人は見たいものしか見てい

ないのかもしれないと、反省した。

見たいものしか見えない

ビデオには確かに、子どもの手が水面の中に手を入れている様子が映っている。子どもたちはメダカと言わず「おさかなさん」と言っている。だから子どもはメダカに触ろうとしていると担任も私も思った。「メダカに興味を持ったんだな」と子どもの心を想像した。さらに、その様子から「室内で飼っているメダカと同じだと気づくのかな」とか「餌をあげたいと言いつくさるのか」などと思った。あとも触れるが、この連想のことを指導案の世界では「次の子どもの姿」とか「想像される子どもの姿」などと言われる。……メダカの絵本があったな。「めだかの学校」の楽譜

ならあそこにあるぞ……。想像される子どもの姿から、それに相応しそうな教材と活動を想定する。このような思考が、保育士なら起きる。これを「興味や関心に基づく生活の展開」とか「環境の再構成」というから、いかにも高尚そうではある。

ところが、事実は違っていた。子どもたちの手は、どれもメダカに触ろうとはしていなかったのだ。触ろうとしていたのは、いや、正確に言う指先で「掴もうとしていた」のは、蓮の葉の上を、銀色にキラキラと転がっている水玉だった。

初夏の太陽の光を反射しながら、ころころと転がっている水玉は、宝石のように美しい。その光り輝く水玉を見て、手にとろうとした子どもがいるだろうか。その水玉が目に入

子どもの  
ココロ

連載 3

【せいがの森保育園園長】  
倉掛 秀人

見ているようで  
見えていらないこと



くらかけ ひとと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森保育園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

れば、触ってみたいと、誰もがそう思うだろう。子どもの指先はそれを掴もうとする。が、もちろんできない。蓮の葉だけが水面下に押し込まれて姿を一旦消し、子どもが手を離すと、大きな葉がバシッと水を跳ねあげて顔を出す。と同時に、また葉の上をなぜか水玉が転がっている。すると、また子どもの手が水玉に伸びる。掴む。逃げる。隠れる。バシヤ。その繰り返し。何度も続く様子が、動画の隅に収まっていたのだ。

子ども理解から環境の再構成へ

したいのかわからないことが多いと思う。それを「悟る」という場合もある。これが究極の見えた！なのだ、しておこう。

見えたと思った子どもの心が違っていたら、子どもに体験させてあげたいことが変わってくる。保育者の「願い」が変わってくる。メダカだと思いついていたことも、銀色の水玉だったのかと気づけば、全く別の展開となる。

「ベランダに蓮の鉢を置いてみようか。そうすれば、もっと身近な場所がよく観察できるだろう。そうだ、蓮の葉で色水遊びをしたらどうなるだろう、いや、それではあの美しさが台無しになってしまう。この年齢ではこのままの方がよい。幼児になったら観察ゾーンに一枚の蓮の葉とスポイトを持ち込んでみよう。水が水玉になるのは、蓮の葉の上であって紙の上ではならない。年長のあの子どもたちなら、不思議だと思いかもしれない。葉っぱ、和紙、折り紙、セルロイド板、蓮の葉でできたお皿……ジッケンが好きだから、色々試して遊びが発展してくかもしれない」こんな具合だ。

ここでは保育実践を語る場ではないので、これ以上は述べない。ただ、次のことは普遍的な原理だと私は考えている。それは教育を仕事としている以上、決して忘れてはならないことだ。しかも年齢、性別、能力などに全

子どもの心を見ることは、存外難しい。とらえたように思い込んでいて、間違っていることが多いのかもしれない。子育てや学校教育で、こんな行き違いはよく起きていそう。そう思ったほうがいい。もっと、よく見ようとしたほうがいい。子どもに向かい合う時間が欲しいと思う。でも時間があっても、向かい合うことができるとは限らない。私にとつて子ども理解をめぐる「究極の問い」がある。それは、子どもに対して「あなたは、本当は何をしたがっているのですか」という問いである。聞けば答えてくれるというものではない。もちろん、ない。本人だって本当は何をしたかったのか、わからないこともある。真面目な話、私たち大人も自分の人生で本当は何を

く関係がなく、乳幼児から児童生徒、学生、成人、高齢者まで当てはまる。認知症予防にも当てはまるだろう。

その原理とは、「近い将来に必要なことを見通しながら、今ここで、その人の情意と認知の現状が志向していることに合わせて本人が選択できるような学習状況がデザインされ続けなければならない」（倉掛定義）という原理である。保育の場合は、その教材は生活や遊びの中で扱われるものすべてが対象となる。それだけに保育とは、とても高度な専門性を必要とする営みなのである。

さて、話が、また振り出しに戻ってきたような気がしてきた。子どもの心が見えるというのは、私の心に子どもの心が映ることである。見ていたつもりなのに、見ていなかった。そうか、そうだったのかと気づくとき、本当のことが私の心に映ったのだと思えた。

でも、それもまた本当のことではないのかもしれない。でも、その姿に私たちの心が揺さぶられるのはなぜだろう。きっと、子どものその姿の中に、大事なことがあるからだなと、思う。

心が見えるというのは、子どもが伝えてくる大事なことを受け取れるかどうか、それが問われているように思う。

## 山本先生の実践に感動する

今年三月末、特別支援教育に尽力されている山本佳代子さんの講演を聞いていたら、涙が止まらなくなった。山本さんの愛と行動が、人に「心」を呼び覚ましていく事例に、私の心が打ちのめされた。山本さんの愛によって、たとえば無脳症の女の子が生きる喜びを取りもどし、心が通い始める。

また脳間出血で医師に「意識は戻らない」と宣告された同僚の先生が、山本さんの愛によって目をさます。奇跡としか言いようのない話に聞こえるかもしれないが、本当に起きたことである。人は「心」でつながっている。人は「心」で生きている。その事実が私の心も震えさせた。

## 心がつながるといふ意味

山本さんの話を聞いていて、ある出来事を思い出した。三歳児の牙子さん（仮名）が、玄関で泣いていたことがある。散歩から帰ってきたのだが、部屋へ入ろうとしない。泣いてばかりいて、理由を話してくれない。こんなことが幼児期にはよくある。「どうしたの」という言葉が、何度か彼女に投げかけられるが、返事はない。大人は涙をぬぐったり、背中をさすったりしながら、なんとか気持ちいさを落着かせようとしているが上手くいかない。

彼女は泣きやまない。涙を拭おうともしない。大人は早く泣きやんでほしいと思う。みんなのいる部屋に入って欲しいから、「どうしたの」に続けて、よく「もう泣かないで、みんな待つ

ているから、部屋に入ろうよ」だとか「お腹減ったでしょう。ご飯にしようよ」といった言葉が続くことが多い。そうした「促し」や「誘い」は、その時の彼女の場合、かえって泣き声を大きくさせるだけだった。行き場を失った思いが出口を探している。心が孤立していた。

こんな時は必ず心の出口がある。手がかりもある。玄関で立ち止まっていること。そして室内に入ることを強く拒んでいること。私はその姿から、明らかに分かることだけをそのまま伝えた。そうしたら泣き声が小さくなった。「部屋に入りたくないんだね。いいよ、入らなくても」。

そして、助けを求めているから泣いていると思えたのでこう言った。「どうして欲しいの。一緒にやってあげるよ」。

# 子どもの こころ

連載 5

【せいがの森保育園園長】  
倉掛 秀人

## 人と人の心が 通うという事

すると、すすり泣きしながら、振り返って散歩先の方を指差した。「あっちに行きたいの」と聞くと、こっくりうなずく。「何しに行くの」と聞くと、彼女は泣きやもうとしながら、話しはじめる。むせいているから、よく聞き取れない。ただ右手を私にさし出して掌を開き、言った。

「ミミズがね、あのね、ミミズがね……」

「ミミズ？ 私があっけにとられた。どうも散歩先で見つけたミミズを落としてしまったらしい。落としたかもしれない場所へもう一度探しに行きたいと、彼女は泣いていたのだ。いや、そうはつきりとしたものではないかもしれない。でも「じゃあ、探しに行こう」というと、ピタッと涙が止まり、目がキラキラと輝いた。しかも自分の手の中で涙をぬぐった。「心情」が可能性に触れた時、あるいはやりたいことができると思えた時、人間は力が湧いてくる。「意欲」にスイッチが入る。牙子さんの心の中で、せき止められていた思いが外に溢れ出た瞬間だった。思いは心でしか受け止められない。

心が通うというのは、本当にわかってもらえたと感じる心との出会いである。思いは「通路」を見つけると、そこに一気に流れ込む。その流れのなんと強いことか。生命力は心の姿勢であり、心の「態度」のことだが、それには強い手応えがある。それを受け止める心のアンテナは

感度よく、かつ柔軟でしなやかでなければならぬ。これが養護の働きである。これがなければ、心の動きをキャッチもできず、できたとしでも受け止められない。その強い生命力によって破れてしまうからだ。

ちなみに、この「心情」「意欲」「態度」は幼児教育の「ねらい」の二本柱である。私は生命力のトライアングルと呼んでいる。

## 人工知能には決してできないこと

玄関で止まっていた牙子さんの時間が刻み始めた。彼女は走り出し、探し始めた、失ったものを。その結果、彼女は自分で部屋へ戻った。ミミズは見つからなかったけど、彼女のやりたかったことは見つかったのだ。それは思い通りに自分の心を動かしてみようという「生きた時間」だったはずである。

子どもは共感してくれる大人に、心を聞く。そういう言い方がよくされる。人は心と心を通い合わせようとする。生まれた時から、そして何歳になっても、それは最期まで続く。なぜだろう。心というのは、その人のものだけだ。他人との間で「生きる」ものだからだろう。

個人のものでありながら、他者との間でしか生きられないのが人間の心であるとしたら、どんなに人工知能が発達しても、どんなに優れた



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森保育園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

ディープリンングでも、「心を通わせること」は決して経験できないだろう。牙子さんが頭をもたげていった姿を見て、そう思った。人間性は、人と人の間で育つものだから。その育ちゆく心の、最も尊いものが愛である。

## 愛することが生命力を育てる

山本さんのように、強い愛情を持った人の行動は、他人の心を揺さぶる。私のように鈍感な心でさえ、清水に洗われるような出来事になる。ましてや感受性が豊かな子どもにとって、愛に溢れた大人の存在は影響が大きい。山本さんのような方は、子どもの心声を聞くことに真剣である。周りからどう見られようと、構わない。真正面から子どもを信じきっている。だから、周りの大人たちが時々、ついていけないようなことも起きる。だから教師には、時に子どものための「勇氣」も必要である。

大人になるといふのは、あるいは教育といふのは、愛情豊かな人になることなのだ。素直にそう思う。影響を敏感に受けやすい子どもはそばにいる大人は、このことを忘れてはならないだろう。大人が持っている愛情を子どもは心の栄養にしているからだ。決して、大人の指示が通るだけの心を育ててはならない。態度から意欲や心情は育たない。順番が逆である。

年長のH君は、つい先日、跳び箱の四段を跳んだ。よほど嬉しかったのだろう、昼食の時、自分のお皿にプロッコリーのサラダを幾つも載せていたから、担任が「よく食べるねえ」と声をかけると「だって、縦の五段跳びたいから」と、興奮気味に言った。縦というのは、跳び箱の向きのこと。

十月の運動会まであと十日。もりもり食べて力をつけるという。目標達成の意欲にあふれた彼なりのプランが微笑ましい。先生たちは「可愛いなあ」と目を細めて語り合っている。運動会に向けて、どんな展開になるか楽しみだ。

楽しみであると同時に、私は保育目標が実現していくプロセスを目の当たりにした思いがして嬉しくなった。運動会に向けた日常の中で、体を動かすことが楽しくなり、子ども一人ひとりが自分の目標達成のために意欲的になる。そしてその結果、身体的な力も育つ。これは「経験カリキュラム」と呼んでいるもので、心構え、意欲、態度の順序性が大切にされている。

ちなみに学校教育は「教科カリキュラム」といつて経験すべき事柄が教科ごとに系統的に整理されている。就学前の乳幼児期の教育は元来、アクティブラーニングであり、五感を使って体験し、知らず知らずのうちに心情や意欲や態度が育まれるように、生活と遊びを重視する。

勉強でも仕事でも、スポーツでもなんでも、人が意欲的になるには、それに火をつける何かが必要である。それは乳幼児の場合、心揺さぶられるような「心情体験」だとよく言われる。

先ほどのH君の場合は、跳び箱の四段を跳べたことがとても嬉しかったようだ。跳び箱を跳ぶにはコツがある。「トントンパ」の三拍子のリズムである。普段から外遊びをたくさんしていると、跳躍力や支持力、目と手足の協応力などが育っているから、コツをつかむと難なく跳び越せてしまう。それが「嬉しい」という心情体験を生んだのだ。

ちように運動にいい季節になったが、夏の水遊びでも毎年ドラマが生まれる。数年前のちよ

# 子どもの こころ

連載 7

【せいがの森保育園園長】  
倉掛 秀人

## 心情は人と人の 間で成長する



くらかけ ひとと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森保育園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士、前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

うど今頃、夏のプールの思い出を一枚の絵にした年長児S君がいた。クローリングが出来るようになり、その泳ぎっぷりを見て欲しくて「園長先生、今日、絶対来て」とよく言っていた。彼の絵には二人が泳いでいた。青で塗り込められたプールの真ん中に大きくS君。そのすぐ下に連れて泳いでいる友達のH君も描かれていた。

保育室に飾ってあったその絵を見ていた時、ふと想った。どっちがS君なんだろう、と。友達H君の方が泳ぎはうまい。もしかして、S君に聞いてみた。「こっちがH君で、こっちが僕」。予感的中した。プールの真ん中を堂々と泳いでいるのは友達H君なのだ。彼に泳ぎを教えてもらったという。右下にやや小さく描かれている本人は泳ぎが上手くなったことが嬉しいのだ。改めて絵を見た。プールの青が鮮やかだ。夏の友情というタイトルをつけたくなった。

### 心情について大学生と語り合う

「喜怒哀楽。これが心情です。気持ちです。他にもたくさんあるから、思いつく限り、出してみよう」。保育士を養成する大学で、学生たちと「心情について」に語り合ったことがある。保育は、子どもの心を育てることだから、どんな心があるか確かめてみよう、という授業である。

嬉しき、楽しき、有り難き、面白き、可笑し

さ、愉快さ、悲しさ、寂しさ、怖さ、怒り、恥ずかしさ、悔しさ、心配、焦り、戸惑い、勇気、優越感、劣等感、憧れ、後悔、愛情、憎悪、意欲、好奇心、探究心、不思議に感じること、根気や本気というものも。いろんな「心持ち」を出し合った。

跳び箱にはまっているH君や、泳ぎがうまくなったS君の心は、嬉しさや面白さ、達成感といったものが「意欲」に火をつけたと思われる。もつと良くなりたいたいという向上心、どうしたらもつと良くなるのだろうという探究心などと響きあう他の心も想像していただきたい。

保育では、このような子どもの気持ち、正確には「心情」の移り変わりを「心の動き」ということが多い。その育ちが「教育のねらい」の筆頭に掲げられている。その中でも「意欲」は特別な様相を持つ。意欲は動詞を修飾する副詞で表すことが多い。たとえば「もう一回」とか「もつと食べたい」とか「また来てね」のように。H君は今「もつと高く跳びたい」だし、S君は「もつと早く泳ぎたい」だった。

こうした意欲は心も行動も、その「一歩を踏み出す」ための原動力のようなものである。それが思考や表現となって「心の姿勢」を創り出していく。だから「心情」の中から、「意欲」を特別に取り出して、教育のねらいの二つ目に掲げている。ちなみに三つ目が「態度」である。

### 人と人の間に生まれる気持ち

その授業で「心情」の例として、孤独感が取り上げられた。孤独を感じる時って、どんな時だろう。三年生の大学生にこう尋ねた。すると「周りの人が楽しそうにしているのに、自分には友達がいなくて感じたとき」という話が出た。孤独というのは、一人でいる時は気づかない。それなのに、集団の中だと孤独を感じることがある。感情は人と人の関係の中で、輪郭を持ち始める。

「孤独」という心情を語り合ううちに、「気持ち」というのは、一人では生まれないんじゃないか」という考えに辿りついた。「そつと肩に手を添えられて『だいじょうぶ』って言われたとき、私は孤独であることに気づいた。泣きそうになった」というエピソードを私は紹介した。しかも、心配してもらって相手によって、私の孤独感は全く異なるものとなって現れたことも。

こうしてみると、人が育つには、心が育つ必要がある。その心は人と人の間で生まれ、育つ。いろんな感情を経験しながら、意欲が芽を吹き大木にまで生長する。意欲の悲鳴が孤独だとすると、子どもの悲鳴は、声にならず、表情や姿勢に表れているに違いない。





## 6歳児が書くひらがな

B5サイズの紙に、文字らしきものが書いてある。書いたのは6歳のYくん。「ひらがな」らしい。子どもたちが書くひらがなは、暗号のつもりで読むことにしている。「し」と「く」も同じように見える。「暗号解説」すると、こうなる。

「やりたいこと いきたいしょ みつけたら まよわないで くつをはいて でかけよう」。

担任によると、アニメソング『夢をかなえてドラえもん』の二番の歌詞だという。

## 書き直しの中の学び

ある朝のことだった。この曲を歌っている

# 子どもの ココロ

連載 11

【せいがの森保育園園長】  
倉掛 秀人

いく。知らないうちに音と文字がどこで切れるのか「音節」を学んでいるのだ。

幼児教育では、言葉の学びを大切にしている。教育の五領域では言語とは言わない。言葉である。なぜなら、日常の生活用語を大切にしたいからだ。聞いたり、話したりすることが中心で、読んだり、書いたり幼児の後半になる。ちなみに人類七〇〇万年の歴史で、読み書きが一般化したのは、つい最近のことである。人間は「聞く、話す」世界で進化してきた。

## 書くことに興味が発展

ドラえもんの歌詞を書いたYくんをはじめ、文字を読んで歌えるのは年中から年長たち。うちの園では〇歳児クラスから、ふんだんにある絵本と親しむので、お話を「聞いて」楽しむことから、自分で絵本を「読んで」楽しむことへ、重なり合いながら広がっていく。そして年長ぐらになると、ひらがなやカタカナを書くことに興味が移っていく。

Yくんとその仲間たちが、模造紙の歌詞作りに没頭したのは、昨年九月のことだ。その月の誕生会で、この歌を歌うことになった。参加した他の子どもたちや保護者も一緒に歌ってほしい。そんな気持ちも芽生えていた。そして彼らは実感した。他人に見えるように

子どもたちがいた。歌詞カードなどはない。見ないでも歌っていたからテレビで聞いて馴染みがあるのだろう。ところが二番も歌いたいけど、歌詞がわからない。そこでYくんが登場する。彼は歌詞を覚えてきた。彼は家で書いたという紙を、翌日持ってきた。それがB5サイズの「暗号文書」だったのである。担任は、それを早速、A3サイズに拡大して、台紙に貼った。ところが、暗号は子どもにとつても暗号らしい。しかも、文字がかすれている。暗号の作者はマジックで線を太くした。それでも後ろの方の友達が遠くて「見えない」という。その日、合唱はそのまま終わったが、歌詞は数日かけて、何人かの子どもたちによって大きな模造紙になっていた。これなら遠くからでも見える。その過程で、暗号は正しい日本語になっていた。こう

# 学びの軌跡を追う

大きく書けば、文字は役立つ、ということ。私はこの三月の卒園式後の謝恩会で、この曲を年長さんたちと一緒に歌いたいと思っている。彼らが作った歌詞の模造紙を保護者と一緒に見ながら。

## 活かす経験で身につくもの

幼稚園や保育園では、運動会など参加を呼びかけるポスターや祖父母への招待状(手紙)などを書くことがある。これらは、定番の活動とも言える。一方、即興性の高い経験カリキュラムやアクティブラーニングの面白さは、生活をよくしていく価値づくりや、社会の一員となっていく営みと結びつく自発的な活動なら「知識や技能」がしっかりと身につくところにある。活用しながら習熟していく。本番が先で練習は後だ。

実際のところ、子どもたちが書いたひらがなは、間違いだらけで、その間違いに気づき、指摘され、修正していく中で、正しいひらがなを学んでいった。それでいいと思っっている。そこには、子どもたちのアクティブな心の躍動があるからだ。それは思考力や判断力や表現力でもある。こんな学びの軌跡をたどると、その原動力となっている、学びに向かう力とは、心情や意欲に他ならないこともわかるだろう。

して「暗号文書」が正しい「ひらがな」になり、立派な「歌詞掲示」に変わった。

## しりとりで学ぶ言葉と音節

こんな生活の中で、多くの子どもたちが「ひらがな」と出会う。小さい子どもは聞いたことのある、頭の中の「音」が、一つ一つの文字に対応することを知る。三歳の頃「ど」や「ら」や「え」や「も」や「ん」に関心がむく。だから「あつ、ど」があったと身の回りの文字に興味広がる。そんな子は、ひらがなのパズルでよく遊んでいる。

その頃、しりとりに遊びが楽しくなる。朝のお集まりでも、よくやっている。絵カードを使ったり、先生がボードに絵を描いたりしながら「たぬき、き、だよ」「きつね」「ね、ねこ」……こうして、新しい言葉をどんどん覚えて



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森保育園(東京・八王子市)勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

## 生活を豊かにする意味

それでは、正しい文字を書けるように指導しない方がいいのか。それも思わない。正しい、美しいひらがなが書ける大人になってほしい。だからこそ、乳幼児期にたっぷり、文字を探索する時間を保障してあげたい。

話がやや脱線するが、ひらがなは、曲線が実に美しいと思う。筆を使う「書」からきているから、バランスも大切にされている。縦書きのための、はね、はらい。スピード感とリズムもある。こんな文字は他にない。ひらがなの生い立ちが、最初から芸術的なのである。だから、いろいろやってみよう。

例えば、ひらがな一文字ずつを粘土で作る。細長いカラフルな粘土を子どもと用意する。書き順で色を変えて重ねていく。そして窯で焼く。ひらがなの着置きやペンダントになる。あるいは全身を使って数人で一文字を作ったこともあった。それを写真に撮って文字カードにする。もし筆で書字をしたら、細くなったり太くなったり、勢いをつけたり、ゆっくりゆっくりとなぞったりして遊びたい。子どもの心は文化に浸かっている。どうも大人は、ドラえもんのポケットの中身を、吟味した方がいいらしい。子どもと創り上げる文化的実践が、正統なものとなるように。

子どもの心は人と人の間で育つ。育つて咲く花は愛である。そんな思いを抱きながら、私はこの一年、子どもの姿に芽や葉、根や果実を見つげながら幼児教育の終わりの頃までの「子どもの心」を点描してきた。今年度はベクトルを一八〇度回転させて、花を咲かせる種の不思議を探ってみたい。赤ちゃんから胎児、父母、遺伝子、霊長類へと一旦、時間軸を遡ってみる。いわば心の「故郷」を探す旅に出てみようと思う。

アウエイからホームへ

この春、赤ちゃんが十一人入園した。当園は、今年度から認定こども園になったので、共働きではない家庭の子どもも入園した。四月三日の保護者会では、こんな話をした。

「家庭がホームだとしたら、子どもたちにとつ

子どものころ

連載 13

【せいがの森こども園園長】

倉掛 秀人

心のふるさとを  
探す旅へ

て園は今アウエイです。でも、ここがすぐにホームになります。園の友達も先生も家族の一員になります。子どもたちだけが、家庭と園の両方で過ごすし、残念ながら、保護者の皆さんは園の体験が見ることができません。だからこそ、家庭と園の緊密な連携が必要なのです。どうぞ、こども園を大きな家族だと思ってください。

園は朝七時から夜七時まで、一日十二時間開いている。月曜から土曜まで週六日、七十二時間が園生活である。家では夕食、入浴、睡眠、朝食の時間がほとんど。子どもが起きて活動する時間の大半は、園である。

「だから、ここでの経験が決定的です」

と、私は毎年語ってきた。家庭生活と園生活をトータルに把握しながら「全体の計画」を立てるが、子どもの保育課程と保護者支援は、切っ

することも多いので今回は全く触れない。最近、面白いと思うのは、前者の方である。人類に残された未知のフロンティアは、宇宙と人間の脳だという。霊長類からヒトが進化してきた中に、現在の私たちの能力の起源を探る研究がダイナミックに動いているからである。その成果の一部が、保育界にも大きな刺激をもたらしている。その一つが赤ちゃんのコンピテンシー（能力）再評価であり、いま一つが考古学と人類学の学際的研究による「人類の子育て学」である。」

ここでいう「前者」とは、「人間が持つて生まれた資質など先天的なもの」Aの話である。ホモ・サピエンスの赤ちゃんは「九か月革命」を迎える時期に、他人の意図を読み取ることができ、生まれる前の道徳性の起源に、ふさわしい道徳教育のあり方さえ探られている。現代の科学では、これらの答えを、遺伝と環境のどちらかだけに求めることはない。四角形の面積の大きさの原因を、底辺だけ、高さだけに求めても仕方がないのと同様である。それにしても、日本の学校教育は100点のテスト結果を、教育Bにだけ求めすぎではないだろうか。

次の対話はNHKの対談番組「スイッチ・インタビュー」の一コマである。探検家の関野吉春さんが霊長類研究者の山極壽一さんに尋ねる。「人類は七〇〇万年前にゴリラやチンパンジーなど霊長類から分岐した。その間に人間だけが

でも切れない関係になる。さらに地域との「協働」も園の役割として重要になっている。

遺伝と環境の四角形

昨年六月、私が所属する「多摩ニュータウン学会」で話を頼まれた。その内容は、学会誌の最新号で紹介されるが、次のように書いた。

《私は子育てや教育を考えると、その正統性はどこにあるのだろうか、いつも思う。とりあえず、このように考えることにしている。正統性の起源は「人間が持つて生まれた資質など先天的なもの」と『地球規模で維持可能な共生社会』を将来創り出す社会性を備えた大人になるための、後天的な教育』の掛け算で成り立つ、と。》

「掛け算」というのは、こういうことである。「人間が持つて生まれた資質など先天的なもの」をA、「後天的な教育」をBとしたら、それを



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森こども園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

二足歩行をし、言葉を発見し火を使った。いろんなことをやってきた。そのなかで、これをやらなかったら今の人間はいなかったらという、一番の業績は何ですか。」

共にあるという心

この問いに対して、山極さんはこう話す。

「簡単に見えるようなんだけど、それはね、食物を共有すること、それと共同保育をすること。あらゆる生活が共にあるという『心』によって作られているということ。これが人間としての出発点だと思えますね。これがなかったら人間にはならない」「大切なのは近隣関係です。近隣関係とは家族は一つではダメだと。複数の家族が集まって共同生活しないと、家族というのは存立できない。その近隣関係というのが動物の社会にはないんですね」

この映像を、多摩ニュータウン学会で紹介し、四月には、保護者にも見てもらった。ここに心の故郷があるような気がするからである。

そして、教育の正統性の源も、ここにあると思える。子どもには子ども集団が必要だが、その関係が危うい時代になっている。だからこそ、大人の冷静で真剣な対話を、子どもにも見せる必要があるだろう。子どもは大人の真心に触れたがっている。もちろん、人類の遺産を持つて入園してきた当園の子どもたちも。

人類学から学ぶ保育

ところが悩ましいのは、AはBによって変化してしまうことがある。Aは適正な処遇Bによる交互作用いかんによって変化するのである。遺伝学のエピジェネティックの話に似ている。狭い地面Aに、教育という高層ビルを建てようとして倒れる、あるいは地面が陥没してしまう。運動が好きだからと、練習に練習を重ねて鍛錬を課していたら、運動が大嫌いになったり、ある日、燃え尽きてしまったりする。

幼児教育は呼べば答える応答性が大事な時期。Aの志向性になかったBのあり方、啾啄同時の塩梅が、いつも「発達」には付きまとう。発達課題と環境の関係といってもよい。

学会誌には、次のように続けた。

《後者の教育は色々なところで議論され耳に

先生の誕生日に紙で紅白饅頭を作った女の子がいた。先生が「わあ、ありがとう」と感激してお礼を言うと、その子はニコッと笑って遊びに戻った。するとしばらくして、また先生のところに来て「さっきの嬉しかった」と聞き直した。先生はまた「うん、嬉しかったよ、どうもありがとう」と気持ちを伝えた。その子は、先生が嬉しかったことが嬉しくて、またそれを確かめたくなったのだろう。

共にあるという心

前回の連載でご紹介したように、霊長類を研究している京都大学総長の山極壽一さんによると、人間が他の動物と違うのは「あらゆる生活が共にあるという心によって作られていること」だという。この「共にあるとい

子どものこころ

連載 15



【せいがの森こども園園長】

倉掛 秀人

他人の喜びを喜べる心

「う心」とは、どんな心なのだろう。人間にしかないとしたら、誕生日プレゼントを作った女の子のように、私たちに当たり前すぎたきつと見過ごしているに違いない。動物はやらないけど、私たちが人間は何気なくやっていること。そこに「人間らしさ」がある。改めて子どもの心の動きを振り返ってみよう。果たしてどのように、心を通わせたり、力を合わせたりしているのだろうか。

ある年長の男の子が、キョロキョロと周りを見渡している。野菜を切る包丁がそのグループにだけなかったのを探してあげているのだ。また科学遊びの日、スライムにストローを差し込んで息を吹き込み風船のように膨らませていた。そのコツをつかんだ子がまだできないでいる友達にやり方を教えている。こんな例なら枚挙に暇がない。将棋を教えあ

たり、縄跳びや木登りができるようになった友達のことを喜んでいて姿がある。それでは、もつと小さい子はどうか。

二歳児クラスの散歩先で、石碑によじ登ろうとする子のお尻を「よいしょ、よいしょ」と押してあげている男の子がいた。しかも「自分でやらないなら、やらないよ」などと言っている。手伝うという意味の本質がわかっていると先生も感心している。

さりげない優しさ

毎年三月頃になると、一歳児クラス「ぐんぐん組」の子どもが、階段を上手に昇り降りできるようになる。お互いに手を叩いて喜んでいる。「できたよ」「できたね」という会話が、見ている私たちをも嬉しくさせる。その微笑ましい様子を主任が四月の保護者会で伝えて



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森こども園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

いた。バランスを崩さないように、そつと体を支えてあげている「一歳の手」がクラスだよりに写真入りで載っている。題名は「紳士なぐんぐんさん」。こんなさりげない優しさは、家庭では見ることができないと、我が子の「育ちの喜び」を分かち合った。

言われてみれば、確かに動物はこんなことはいない。人間だけの営みであるのは間違いないだろう。もう少し、事例を拾ってみよう。一体何歳頃から、こんなやりとりが生じているのだろうか。

小学校の先生と保護者が集まっている会合で、こう聞いてみたことがある。「子どもはいつ頃から他人を助けようと思うと思いますか」と。「五歳の年長さんでしょうか。それとも三歳の年少さんでしょうか。それとももつと小さい時から助けようと思うのでしょうか」。

他人を助けること

三歳頃から手を挙げた方が多かったです。三歳頃からは○歳児です。満一歳を過ぎれば、はつきりと確認できるようになります」というと、びっくりした方が多かった。○歳児クラスの赤ちゃんが他人を助けようと思うことを、にわかには信じてもらえなかった。

○歳児クラスだから、四月以降に誕生日を

迎えた満一歳も含まれる。それでも「赤ちゃん」には変わりはない。赤ちゃんでさえ、相手が困っていることが分かったら、有益なことを知らせたり、教えたりしようとすることがあるのだ。

例えば、泣いている子がいると、その子が泣き止むようにティッシュやお気に入りのおもちゃを差し出すといったことをよくやる。自分がやってもらって嬉しかったことを他の子にもやるのである。牛乳パックのストローを穴にプッシュと差し入れることができるようになる。嬉しいらしい。なかなかできないでいる子どもがいたら、「やってみようか」という眼差しで見ている。中には「できない」と牛乳パックを差し出し、できる子にお願いする場面もある。

赤ちゃんの「利他性」

心理学の専門家は、このような人間の特徴を「利他性」と呼んでいる。一体、何か月ぐらいから見られるのだろうか。「日本赤ちゃん学会」の研究者が著している書物によると、「一歳半」ころには、困っている相手を助けることができるようになります。落とした物に手が届かないで困っている人に、代わりに拾って渡してあげたりできるのです」とある。「この人が欲しいものはこれだ、というこ

とが分かるだけではなく、その欲しいものをとってこの人に渡してあげよう、という気持ちを、人間はこのように小さい年齢から持つことができるのです」（『赤ちゃん学を学ぶ人のために』世界思想社）。

他人の意図に気づき、困っていることに共感したり、嬉しそうに喜んでいたりする心の動きは、実はもつと小さいうちから見られる。赤ちゃんの視線や脳波を測定する技術の進歩によって、まだ話したりできない八〜九か月の赤ちゃんが、動画のアニメーションを見て「いい人か悪い人か」を判断しているらしいことがわかってきた。それらの動画には、人形や顔らしいイラストやアイコンが出て来て、助けたり邪魔したりする動きをする。それを見た赤ちゃんは、協力的な動きをする「いいやつ」を手に取り、邪魔したりする動きをする「悪いやつ」に怒る。

人見知りが始まるかどうかぐらいの月齢である。何が悪いことで、何が悪いことを教えることができる月齢ではない。協力的であるかどうかという倫理的判断力を持って生まれて来るらしい。赤ちゃんにとって自らの生存に関わる問題だけに、優先度が高いのかもしれない。いま研究者たちが精力的に追試している分野だ。



赤ちゃんのポンプン

まだ話もできない一歳未満の赤ちゃんが、相

我慢するために相手の非を先生に訴えるという、心理的な合理化じゃないか、と。ところが詳しく聞くとそうではなかった。彼には直接の利害関係がない。それよりも、製作遊びで使う材料は、みんなで分かち合って使うという決まりをTくんを守らせたのだ。ここでも、子どもの訴えの正しさを感じる。しかも、ポンプンと怒っている。自分のことではないのに。この「ポンプン」を子どもの「公憤」と呼ぼう。自分に直接メリットはないはずなのに、それを守ることが巡り巡って自分たちの利益につながるような仕組みを、私たちの文化は持っている。そのような利他行動は進化生物学で「間接互惠性」と呼ばれている。食べ物を分け合ったり、遊びの材料を共有したりすること、そのルールを守るために彼らは、かなりの労力を払っている。だから子どもたちが「ずるいよ」という時、とても大切なことを訴えている場合があるかもしれない。単純にギブ・アンド・テイクの不公平を問題にしているのではない場合があるのだ。自分の利益の損得勘定ではなく、正しさや善への志向性のようなものが、子どもには確かにある。では、それはいつ頃から、どのように身につけていくのだろうか。



子どものこころ

連載 17

【せいがの森こども園園長】

倉掛 秀人

「Mくんは正義感が強くて、黙っていられたかったんですよ」「Rちゃんは友達へのけんかがあると、なんとか仲直りさせようと間に入りたがるんです、平和主義者だから」。園生活の中で、先生たちから、こんな子どもの性格描写を聞くことがある。公平や平等、正義や平和といった言葉を私たち保育者が使うと言うと、社会学者ならきつと強い興味を引くだろう。実際のところ、子どもたちは、自分とは利害関係がないことでも「間違ったこと」には、とても敏感だ。

不公平なことは許せない

「ずるいよ。だって、食べようと思ったら、もうお代わりに来るんだもん」。年長さんの抗議の弁である。数年前、試しに先にテーブルに着いたグループから昼食を食べ始めたこと

子どもから学びたい 公正



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞記者を経て、せいがの森こども園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

がある。みんなの配膳がまだ済んでいないのに、食べ終わった子どもが、早々とお代わりになるから、配膳当番の子はいつまでも食卓につけない。 どうしたらいいか話し合った。すると先に食べたいという意見は三歳の年少児に多かった。一方、五歳の年長児は「みんな揃ってから食べたい」という。自分たちが席に着くまで待っていてほしい、「そうじゃないと、ずるい」というのだ。この不公平感の訴えは、話し合いの決め手になった。先生たちも年長児の肩を持った。

子どもにも「公憤」がある

進化人類学者によると、ホモ・サピエンスは狩猟採集生活の中で手に入れた食物をその場で食べず、子育てをしている共同体に持って帰って分けた。そのように食べ物を分け合うことは、他の霊長類にはできないという。今私たちが

手を困らせるようなことや、邪魔をするような行動をする他者に「怒る」という研究成果を、前回（八月号）紹介した。注目したいのは、その「怒り」が反利他的な行為に向けられており、しかも「罰する」あるいは「懲らしめる」かのように振る舞っているということだ。利他的というのは「無条件で相手を利用すること」だ。そうだとすると、人は生まれながらにして、利他的な行動を好み、そうでない行動を罰しようとする傾向を持っていることになる。赤ちゃんにも公憤「ポンプン」があるのだ。

子どもは、子ども同士の生活の中で様々な「決まり」を学んでいく。決まりは守られて初めて意味がある。決まりの中心はその国や地域、共同体によって違う。決まりを成立させ維持させているのは、人間の「利他性」や「公平性」だと思えてくる。なぜなら人間関係から「望ましさ」を訴えてくる子どもたちがいるからである。

日本の学校教育に子どもの「善さ」を認めるように尽力された村井実先生は、二人以上の関係性が個人の「望み」（欲求・願い）を「望ましい」「善さの訴求に変える」という。それが社会規範の根拠であると。言い換えると、子どもは自らの恣意的な望みが利他的であって初めて、望ましい社会的価値を生むことになる。園児たちは利他的であることに公平感と

平和を感じ、規範を守らない他者を告発する情熱さえ持っている。

なぜ戦争をするのか

チンパンジーから枝分かれして七〇〇万年以上にわたる私たちの共通先祖が、結果的に選択した方法が生存に適してきた。例えば食べ物を独り占めした現生人類は淘汰されていなくなっているのかもしれない。あるいは人間が政治家の不正や依怙鼠眉、不倫のようなある種の社会規範に敏感なのは進化的基盤を持っているからかもしれない。そして社会規範を強固に維持するのは、今でも罰であり評判でありゴシップであることは、マスコミを見れば明らかだ。

もう一つ、重大な疑問がわく。人間がこんなに利他的で協力的で倫理的で道徳的なら、どうして戦争やテロや虐殺が起きるのだろうか。こんなに道徳的だからこそ、大人はルールを守らない他者を罰しようとして、冤罪を起こす構造に似ているのだろうか。倫理的であるからこそ、誤るのだろうか。国家間では何を正義と考えるかの違いから憎悪の連鎖さえ生んでいる。罰の通告によるチキンゲームは人間による威嚇よりも「利他行為の競争」にシフトすべきなのだが。

「あつ、魔女がいるよ」。六歳のKくんが教えてくれた。玄関がざわつき始めた。一歳のNちゃんが先生に抱かれて「えーん、えーん」と泣いている。そばには魔女と吸血鬼がいた。かぼちゃの帽子と黒いマントを羽織った片目の大男もいる。小さな園児たちが、先生の後ろに隠れている。地域で寺子屋活動をしているグループを訪れたのだ。大学生が小学生を連れて、「ピーポくんの家」を回っている。不審者に追われたとき逃げ込む場所はどこか、前もって知っておこうという活動だ。ただ回っても面白くないのでハロウィンの時期に「トリック・オア・トリート」と言ったら、小学校の保護者会に提案したら、数年前から実現した。

ところが、乳児には恐ろしい日になった。



# 子どものこころ

連載 19

【せいがの森こども園園長】  
倉掛 秀人

## 母音から感情を想像する

そこまで考えなかった。お化けや怪物が大勢でやってくるとは。二〜三歳ぐらいまでは節分の鬼はもちろん、プレゼントを持ってくるサンタクロースだって「いや〜」と、大騒ぎになるというのに。

### 子どもの声が響く園生活

十月の運動会では、年長児の個人競技で跳び箱を飛び越えるたびに、保護者席から「お〜っ」と歓声があがった。午後のレクリエーションでは、園児、小学生、大人の三チームで対抗リレーのトーナメント戦をした。決勝は大人対園児。大人が五人多いというハンデの中で、手加減なしで、本気で走った。私も走らされた。親が園児を抜いていくたびに「わあ〜っ」と会場が興奮に包まれる。しかしゴールテープを切ったのは園児チーム。このハンデには無理があ

った。「子どもチームの、勝ち〜」というアナウンスに子どもたちは「一緒に「わ〜い」と飛び跳ねて喜んでいいる。大人は「はあ、はあ」と息を弾ませながら、子どもの喜ぶ姿に大きな拍手を送り、幸せを感じながらひと時を過ごした。

### 声が感情を表している

今回の「子どものこころ」は、感情を表す「声」に着目してみたい。「あつ」と驚いたり「わあ〜い」と喜んだり、「いや〜」と恐れしたり、「え〜ん」と泣いたり、「お〜っ」と感心したり。園には、いろんな感情がある。子どもは喜び、驚き、笑い、恐れ、泣く。こうした喜怒哀楽は、ほぼ世界共通である。どこに住んでいようが、嬉しい時や悲しい時に出す声は同じだ。この自然な表出は、文化的な影響を受ける前の、持って生まれた「声」である。



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森こども園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

だから乳幼児が生活する園は、人間の「声」の博物館でもある。大人になると消えている感情もあるからだ。子どもたちが表してくれる感情は、太古の昔から人間に備わったものだ。その声を聞くだけで、今、どんな心情でいるのかわかる。誰にも教わっていないが赤ちゃんは、その表現方法も身につけている。だから私たち大人にも理解できる、共通したサインなのだ。

### 感情から生まれた母音

感情と母音や子音は結びついている。「あー」という母音は、開放感を伴う喜びの感情を表す。私の個人的な経験でしかないが、地平線から太陽が昇ってくるイメージで、心が明るくなっていく。「おー」は偉大なものへの感嘆を伴う感情だろう。「うー」という音は、唸りである。恐れや怒り、痛みを内に込めている状態だ。犬などの動物も敵に警戒するとき、この音を出す。これらの中間にある「え」と「い」は気持ち急激に動くときに出る。鋭い角度を感じる。前へ突出する感じで、「イエーイ」とハイタッチするとき、竹刀を振り下ろすときこの声飛び出す。

私の勝手な解釈でしかないことを断っておくが、これらの母音は、動物から人間まで普遍的な気がする。世界中どこでも母音が似ているのは、人間の感情が普遍的であることを

物語っているのではないだろうか。この母音が子音と組み合わせると、言葉が多様な意味を伝えるようになったに違いない。

人類だけがこんなに多様な言葉を手にしたのはなぜだろう。生き抜くための本能が持つ根源的な感情は脳の古い部位に収まっている。強い動物に襲われて、食べられていた私たちの先祖は、恐怖から逃れ、やっとなりつた食物で空腹を満たす満足感と安堵感の「あ」、周囲を警戒する心理である「お」、そして危機が去るまで辛抱強く我慢し続ける忍耐力の「う」の感情が、私たちの心の奥深いところにあるような気がする。満足感、恐れ、忍耐

これはチンパンジーなどの動物も持っているだろう。「あ」と「お」と「う」という母音を手にした人類は、その感情を外に表出したとき、仲間と協力するとき、有効に働いたからではないか。母音を発することができた声帯が、ホモ・サピエンス同士を繋いだのではないか。そして他者と戦う闘争心や勇気とともに、他者に助けを頼むとき、そして喜びを分かち合うときに「い」や「え」の母音が発達したのではないか。私は卓球をしていたので選手が出す「サー」の感情がよくわかる。

### 古い感情に負けなかったために

そこでいつも連想するのは、赤ちゃんの泣き

声だ。甲高い音で、遠くまで聞こえる。ソラシドレぐらいの高音階で波打ちながら、訴えるように泣かれると、私たち大人はストレスを感じ心拍数が急上昇するようにできている。何はさておき、「赤ちゃんを泣きやませよう」という行動に私たちを仕向けるのである。この反応と共同保育が私たちに刷り込まれたのも、赤ちゃんの声帯の進化かもしれない。大人がストレスを感じるのは自然なことだ。不自然ではない。もし、赤ちゃんの泣き声心地よかつたら、誰にも助けてもらえずに、多分、私たちはパンパイヤの餌食になって、今ここにいないだろう。

人類学者は「心の誕生」のシナリオをいくつも描いているが、六百万年前頃の共通先祖とそれほど変わらない感情の原型を、私たちは運動会やハロウィンで日にしているのかもしれない。食物を得て命を守るために、飢えと恐怖と敵とに戦ってきた私たちの古い感情には敬意を表す。それが時々、サイコパスのように前頭葉のコントロールから逃れ、ホモ・サピエンスが獲得した愛と共感と協力という新しい感情に、時々挑んでくるときがある。教育の役割がここにある。非認知的能力や社会情動的スキルを育てることは、「あ」や「お」や「う」を発する体験が協同的な学びになることだ。園の玄関には子どもたちが中身を切り抜いた「かぼちゃ」のランタンが、ゆらゆらと輝いている。

赤ちゃんの謹賀新年

今年一月四日の朝。「おめでどうございませう。今年もよろしくお願ひします」。先生同士も保護者との間でも、新年の挨拶が交わされている。そんなとき、思わぬ子どもから「せんせー」と声をかけられた。なんとTくんだ。この四月で二歳になる。びっくりした周りにいた先生も「あれー、今、先生って言いましたよね」と喜んでいる。彼の方から声をかけられたのは、その時が初めてだった。しかも私の膝元に体を寄せ、親しみを込めた「挨拶」である。  
〈先生、久しぶりだね、元気だった？ 今年もよろしくね〉私には、そう聞こえた。



【せいがの森こども園園長】  
倉掛 秀人

全ての大人に赤ちゃんを！

こんな経験をしているとき、「全ての大人のすぐ側に赤ちゃんを！」と社会に訴えたい。赤ちゃんが側にいると、大人の精神状態も穏やかで健全な判断力を回復できるのではないかと思えて仕方がない。生活圏には常に赤ちゃんと老人がいる社会。それが自然で素敵だと思える大人を増やしたい。このプリミティブでアナログな感覚を取り戻すことが、これから先のデジタルな未来社会に必要な前提条件にならないかな、と妄想してしまう。ただし、どの家庭の赤ちゃんにも、園の先生のような社会的な親が必ずいるというのを条件にしたい。そうでなければ側にいる親は疲弊してしまふ。それは核家族化を背景に増加に歯止めがかからない児童虐待を見れば明らかだ。

さて妄想から覚めて、現実に戻るとしよう。

ここに述べた「社会的発達」「身体的発達」「精神的発達」の「三つの視点」は、この四月から使われる新しい「保育所保育指針」および「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に新しく登場する乳児（〇歳）保育のねらいの視点である。それを噛み砕いて表現し直すと、それぞれ「身近な人と気持ちを通じ合う」「健やかに伸び伸びと育つ」「身近なものとの関わり感性が育つ」となっている。

身体接触によるつながり

身近な人と気持ちを通じ合うこと。これは親も担任も毎日感じ取っている社会的な発達である。それは「せんせー」と、言葉になる前からももちろんある。目と目を合わせて微笑みあっていたし、積み木を私に「これやって」と渡しにきたり、私が畳に座ってしばらくいると予想すると黙って好きな絵本を持って来て「読んで」とばかりに、私の前に置いたりする。そして立ち上がって帰ろうとするとパイと手を振る。彼は昨年四月に〇歳児クラスに入園した。親との愛着はすっかり形成されており、人見知りなどもあった。

昨年八月で一歳になったSくんは抱っこすると、ずっしりと重い。発達曲線の上の方をなぞりながら成長して来た。同月齢に比べれば

赤ちゃんの社会性



くらかけ ひでと  
雑誌編集者、新聞社記者を経て、せいがの森こども園（東京・八王子市）勤務。平成19年度から園長。保育士。前保育士養成課程検討委員。東京都第三者評価者。

ば体も頭も大きい方だ。健やかな育ちが体を通じて伝わってくる。まさしく身体的な発達も順調だ。赤ちゃんを抱っこできることは、大人にとっても幸せなことだと実感する。彼のお尻と腰が、私の左腕と胸の間に収まって安定すると、「あっち」とか「これは？」と指で色々な物を指す。こうして身近な世界を共有するのは楽しい。その度に「お月様だね」とか「これ、美味しそう、もぐもぐ」とかやる。彼もまた、いちごやパンを口に持っていく。  
このTくん、Sくんに限らず、赤ちゃんたちは絵本も「世界」の入り口になっている。松谷みよ子『いないいないばあ』やカズコ・G・ストーン『なーんだなんだ』といった絵本が大好きである。その世界を大人と共有したがつている。こうして精神的な発達も豊かになっっていく。

Sくんは今一月現在で一歳五か月なので、この三つの視点はもう卒業だが、この視点で〇歳の頃の育ちを振り返ってみると、「身近な人と気持ちを通じ合う」や「身近なものとの関わり感性が育つ」ということが、いかに人間的なことか、と感動する。社会性・コミュニケーションの発達、特に言葉の獲得と文化的環境への好奇心の強さ。これこそが、過去二〇万年の間にホモ・サピエンス（ヒト）が身につけてきたものだと思ふと、人類学や人間の歴史が世間でブームになっている意味もよくわかる。

赤ちゃんが選ぶ多様な大人を

Tくんは一歳八か月で私に分かる言葉、日本語という「現地語」を使って話しかけてきた。このような能力をホモ・サピエンスが身につけたのは約七万年前だと言われている。脳の容量はすでに約六〇万年前（モホ・ハイデルベルゲンシスの時代）に一五〇〇mlと、現代人と同じまでになっている。つまり言語を獲得したから脳が大きくなったのではない。多くの人と社会関係を取り結び、大きくなっていく社会の規模に比例して脳も大きくなった、そういう社会脳仮説（ロビン・ダンバー）がある。Tくんも、もつと豊かな社会関係を経験したと願っている。だから担任でもない私へも信頼を寄せてくる。彼のやりたいことは他者との

かわりである。それが今の彼の発達課題だ。発達とは、元々ある潜在的な能力が、環境との相互作用によって紐解かれていく生命現象でもある。植物の種が日光、水、空気という三条件で発芽するように。だから発達を保障するための鍵は、環境の方にある。子どもの持つ潜在的な力を発揮できる環境を用意するには、子どもにその行為が選択できるようにすることだ。子どもは伸びようとしている力を使いたがる。人との関わりも同じである。

ヒトの一五〇〇mlという大きな脳は、数百万年以上にわたる狩猟採集社会で徐々に獲得したもので、一五〇人規模の社会に適應している。現代のような核家族や身体接触抜きのネット社会は想定していない。また、その「身体的発達」は、もちろん家庭や園の保育でそうなるのではない。自然にそうなるのである。

新しい保育所保育指針が乳児保育を重視しているからと、誤解されていることがある。それは愛着の対象と時期である。親との信頼関係が安定し、満一歳を過ぎた赤ちゃんたちは、遺伝レベルで親以外の多様な他者と気持ちを通わせたい。だから園の人的環境は核家族をモデルにしてはならない。満一歳を過ぎても特定の保育者としてか接しない保育は、その子どもの願いを捉え損ねているかもしれない。子どもの発達課題を読み違えないようにしたい。